

明星教育センターにおける教職学協働の取り組みについて

御厨 まり子*

2010年度に明星教育センター（以下「MEC」という）が開設され、10年という節目を迎えた。2010年度から10年間 MEC に所属し業務に携わってきたが、10年前は教職協働の言葉自体新しかったことを記憶している。MEC 全体では開設当時から「教職学協働」を意識的に導入してきたがその経緯等を振り返りながら、開設時の意図なども踏まえ記してみたい。

1. 明星教育センター開設から意識していた教職協働

2008年度から学長の諮問委員会として「全学初年次教育準備委員会」が設置され、初めて職員が委員として委員会に参画することとなった。従来は、事務局として職員が委員会に携わることが多かったが、当委員会では、職員も委員として関わり、2年間掛けて教員と共に「自立と体験1」の検討を行っていた。授業担当者ではない職員がそれぞれの強みを活かして関わり、授業内容に合わせた学内のリソースの活用や調整、他大学の情報収集、教育業界の動向やトレンドの調査、教育行政の動向の情報収集など授業設計に役立つ情報を積極的に収集し、教員へ提供しながら検討を重ね、2009年度に「自立と体験1」が完成した。MEC の開設には、こういった背景があった。

2009年度内に MEC の開設が準備され、2010年度に5名の実務家教員が着任した。ほぼすべての教員が学外から着任し、着任の翌週から必修科目「自立と体験1」授業65クラスがスタートしたというスケジュールであったため、MEC 職員2名と勤労生数名とで、積極的に情報提供して、教員と共にとにかくスムーズにスタートできることを目指していた。この時点で、MEC の基盤となる教職学協働がスタートしたと言えるだろう。

「自立と体験1」という授業は、大学教育の専門を学ぶ前の「大学生にさせる」基盤づくりと汎用的能力を育成することを目指した。つまり、大学の既存の専門的教育内容とは異なり、学生生活を充実させるために学内のさまざまなリソースを活用し、1年生にとっての学びの基礎を作り、高校生から明星大学生にさせる授業であった。学生は必要に応じて様々な事務局の部署との接点があり、そういった学生の様子を職員が教員へ伝達し、教員が授業内容を検討するヒントとしていただくことも、初年次教育を所管する MEC 独自の教職協働であった。学部所属教員とは異なる実務家教員であった MEC 教員に、各部署から学生についての様々な課題感を拾い上げ、明星大生の基盤づくりのための授業内容のヒントなる情報提供をすることを意識した。

また、MEC 教員が考える新しい授業内容を具体化するために、MEC で進めている事業などを関連部署に積極的に情報発信するということが、MEC 独自の教職協働であった。「自立と体験1」に関しては、外部から本学での取り組みに対して賞をいただく機会も得ることができた。これは、他大学の初年次教育科目や初等・中等教育の動向などの情報を収集していき、初年次教育科目での実践・研究報告が多い初年次教育学会で情報発信を図っていったことが功を奏していると言えるだろう。10年間では、学外で MEC 取り組みの発表等を50件以上行ってきた。実践報告が多いが、MEC で取り組んでいる実践事例を発表することは、外部への発信になると同時に、他大学との比較の中で本学の課題を見出すことにもつながった。発表を機会

* 学生支援ユニットリーダー兼ウェルネス・UD サポートユニットリーダー

に FD や講演会などに招聘されることもあったが、同じ初年次教育科目での課題共有から他大学からも多くのヒントを得ることができた。

他大学からの見学・ヒアリング等も 20 件以上あった。他大学の興味関心は、授業内容に関する点もあったが、授業運営についての問い合わせも非常に多かった。その場合は、MEC 職員がヒアリングに対応した。このように他大学からの関心を得たのは、大学教育の再構築として必修の初年次教育科目のカリキュラムが再検討される中で、本学が初年次教育に関するセンターを開設し、組織的に運営してきた点が先事例であったからかもしれない。

2. 学生を巻き込んだ協働推進～教職学協働へ

MEC にも開設時から勤労奨学生が配置されていた。勤労奨学生は、学内業務に取り組むことによって、毎月定額の奨学金を得る明星大学独自の制度である。この制度の意図は、明星教育の「実践躬行の体験教育」を具現化させ、学内業務を通じて、学生たちに様々な経験をさせることにあった。

MEC では、配属された多くの勤労奨学生に様々な MEC 業務を支えてもらった。「自立と体験 1」の SA になりたいとして応募する勤労奨学生も多かった。さらに全 65 クラスの授業準備には、勤労奨学生の活躍が欠かせなかった。このように「自立と体験 1」の運営面の補助や、授業内の SA 業務、入学前教育での入学予定者の対応、オープンキャンパスでの自校教育（「明星ものがたり」）の実施、資料図書館での自校教育活動の補助など、様々な業務が勤労奨学生に対する実践躬行の体験教育として行われた。これらの学生の活躍が MEC の「教職学協働」となって、形作られてきたと言えるだろう。

MEC 事務室には、勤労奨学生に正課の授業外の学びを提供するという目的もあった。教員ではなく職員が学生の育成に関わることを目指した。「自立と体験 1」で SA が上級生として身近な立場で 1 年生のロールモデルとして関わり、その中で上級生の SA も成長することと同様に、MEC 業務を担当しながら勤労生ひとりひとりが成長する様子を、職員として見守った。これも MEC 独自の教職学協働の 1 つであった。

勤労奨学生の学びという点では、自校教育の資料の整理に関わってもらうことも大きな意味があった。勤労奨学生が創設された経緯には、私学だからこそ学生たちに明星大学を理解してもらうことが必須であるという考えがあった。「自立と体験 1」以前には、学生たちが自校教育に触れる場面がなかったために、大学自体がどのような経緯で現在に至っているかを知る機会が無かった。勤労奨学生が明星大学の歴史に触れることは歴史（過去）を振り返ることが目的ではなく、現役の明星大生が新しい明星大学の歴史を担う人として、明星大学や母体である明星学苑が様々な教育活動を経て現在に至ったことを理解することが目的である。また卒業後のキャリアを意識しながら明星大学での学生生活を理解することも重要であった。

MEC では、MEC 業務を通じて勤労奨学生に自校教育を行うことにも重点を置いた。たとえば、自校教育関係の業務として勤労奨学生に担当させていたのは、昔の書物のデジタル化である。その業務は、昔の書物をデジタル化するためにパソコンで作業をさせることが目的ではなく、そのデジタル化を通じて、勤労奨学生が明星大学の母体である明星学苑の歴史や当時の教育活動に触れる機会を作りながら、同時に PC リテラシーも養成していくことを目指していた。学生に業務指示を行う際には、必ず教育的な目的を意識し、学生たちが日常では触れることのない様々な機会を作っていた。50 周年を機にリニューアルした資料図書館では、勤労奨学生が来校者へ大学を紹介した。学生が歴史を理解し来校者に対して自分の大学を語ることは、小さい機会かもしれないが学生たちの誇りや自信につながった。明星教育の理念と重ねながら学生の成長を軸に勤労奨学生業務を担当させ、学生の大学に対する帰属意識を醸成し、同時にそれらの業務に必要なリテラシー教育（プレゼンスキル・PC スキル等）をうまく盛り込んだ取り組みであった。業務を与えながら、自分の所属する明星大学を理解してもらうことを目的とし、周年事業ごとに周年史を整理し正しく歴史伝承させていくことは、これからの歴史を創り出すためであるということは、MEC 開設当時のセンター長の想い

でもあった。そのため、勤労奨学生には、ただ単に印刷や仕分け業務だけではなく、これからの明星大学を担う現役生が明星教育に関わり業務を行うという意味をもたせていた。MECでの勤労業務は、学生たちにとってのキャリア形成の場であった。

MECでは、勤労奨学生やSAなど多くの学生の声を聞く機会があったため、その声を大事にして、さまざまな意見を取り入れることも進めてきた。特に「自立と体験1」は、共通教案、共通教材の下で、約2,000名のクラスを運営しており、SAの活躍は大きかった。開設時は、勤労奨学生だけでSAを運営することを計画したが、不具合も生じ、途中から公募という形ですすめることとなった。100名程度のSAには、MEC事務室と分担して授業を支えてもらうと共に、業務を通じてSAを教育するという側面もあった。

このように開設時から年数を経ながら、MECの教職学協働の体制が進められてきた。

3. MEC独自の教職学協働へ

大学には教員組織と事務局組織、学生組織といった異なる組織文化が存在する。開設時のMECは大学の教育改革として新しい取り組みを生み出す場所であり、様々なバックグラウンドを持つ実務家教員とともに、MECのミッションを達成させるために役割をもって目標に向かって活動を推進してきた。初年次教育から、入学前教育、キャリア教育と発展していったのも、そのMECの目標を達成させるための取り組みだったと考えている。

MEC開設当時、初年次教育科目の再編は、明星大学が抱えていた離籍者防止という課題への対応策でもあった。専門性を最大限生かす学部教員とは異なり、時代の変化に対応して初年次教育を組み立ててきたことは必然だったのかもしれない。MEC独自の教職学協働のもとで、明星大学にとって必要な教育プログラム開発を進めることがMECのミッションだと考えて業務に取り組んできた。

教員、職員、学生それぞれの役割を理解しつつ、それぞれの専門性を生かしながら、どんな時代になろうとも明星大学生に身に付けてほしい汎用的能力をしっかりと理解し育成するために、MEC教員の専門性を生かしつつ、他大学にはまねできない明星大学のオリジナルの教育プログラムを、この10年の教職学協働の中で生み出してきた。

開設から10年をもって一区切りとなった。新しい時代を迎え、MECの新しい教職学協働が構想されている。更なる発展されることを大いに期待している。